

## 私の緑色のロバ

イルゼ アイヒンガー 著  
島浦 一博 訳

私は毎日、緑色のロバが跨線橋を渡るのを見る。ひずめの音が橋板に響き、頭は欄干の上に高く突き出ている。どこからやって来るのか私にはわからない、まだ一度もずっと見ていたことがないから。だけども、橋の向こうの閉鎖された発電所から来ているのだと思う。そこからは大通りが北西の方角へ矢のように真っ直ぐ伸びていて（どのみち私にはまったく縁がなかった方角へと）、そしてその崩れた車両進入口には、日が落ちると兵士たちが立っていたりするの、辺りが真つ暗になって、さびついた屋根の上を照らすのが、弱々しい明かりのかけら一つだけになったら、すぐにでも恋人たちを抱きしめようと。でも、私のロバがやって来るのはそれより早い時間。といっても、真昼にもう来ているとか、あっちの捨て置かれた庭の一つ一つを太陽がじりじりと照りつけたり、板を打ちつけた窓のすき間から差し込んだりする時間のちよつと後とかではないわ。そう、ほとんどわからないくらい翳りはじめた日射しとともに彼はやって来るの。私が見た時にはたいいてい、彼はすでに橋の上まで来ているか、橋の階段を上っている最中。一度だけ、まだ向こう側の線路わきの舗装道路をひづめの音を響かせて渡っているのを見たけど、遅刻でもし

たのかしら、急いでいるようにみえた。ちなみにその時に思ったの、彼はやけつくような熱気の中、半開きのままじつと動かないかつての発電所の門から、真っ直ぐやって来ているんじゃないかって。

彼は橋を行き交う駅員やほかの人たちのことなど気にもとめず、礼儀正しく道をゆずり、それに橋を渡っている時にその下を通過する列車のガタンゴトンという音や汽笛の音にすら、関心を示さない。しよっちゅう顔を横に向けたら、下を覗いたりはするけど、それはたいてい列車が来ていない時。しかもすごく長い時間見ているわけじゃない。そんな時、線路と二言三言会話を交わしているように見えるけど、でもたぶんそんなことはありえないでしょうね、だって、そんなことして何になるの？ 彼は橋の中央を過ぎたところで、少しためらってから、引き返すこともなく消えてしまう。これは、つまり彼の消え方だけど、私の思い違いじゃないわ。私だってそれを十分に理解できるもの、だって彼は道をわかっているのに、どうしてわざわざ引き返さなければならないの？

でも、彼はどんな風に、どこからやって来るのかしら、どこで生まれるのかしら？ お母さんとかいるのかな？ 向こうの静まりかえった庭のどこかに干し草の寝床とかあるのかな？ それともこの前まで会社だったところにも住んでいて、身を寄せているその一角にはちよつとした壁くらいあるのかな？ それとも、稲妻が生まれるみたいに、かつての高圧線送電塔と垂れ下がった電線の間で生まれるのかな？ 稲妻の生まれ方なんて、私はもちろんくわしくわからないし、私のロバが稲妻のように生まれるかどうかということ以外は、別にわかりたいとも思わない。私のロバ？ 言いすぎだよ。でもこの呼び方はやめたくない。確かにほかの人だって彼を見ているかもしれないけど、私はその人たちに訊くつもりはない。私のロバよ、エサをやるわけでも、水を飲ませるわけでもないし、ブラッシングしてやるわけでも、よしよししてやるわけでもないけど、でも、彼の輪郭は遠い山なみを背にくつきりと浮かび上がっ

ているでしょ、山なみそのものが午後の空にくつきりと浮かび上がるように。だから私の目には、私のロバなの。彼がやって来るその瞬間のおかげで私は生きていられると言ってもいいんじゃないかな、彼の出現が私が呼吸するための空気を生み出してくれていると、まさしく彼が、彼の輪郭が、彼の緑色のニュアンスが、頭を垂れて線路を覗き込むその仕草が。お腹がすいて線路の枕木の草やわずかしか生えていないハーブを探しているのではないかと思つたこともあつたけど。でも彼に対する同情は控えるべきね。私も子供じゃないんだから、彼のために干し草の束を橋の上に置いたりなんかしない。現に彼は調子が悪いようにも見えないし、飢えているようでもないし、痛めつけられているようにも見えないしね——特別元氣そうにも見えないけど。でも特別元氣そうに見えるロバなんて、きつとほんとにいいはず。

私は同じ過ちを繰り返したくはない、彼に多くを求めすぎるのは嫌なの。私は彼を待っているだけで満足するつもり。というか、逆に待たないでいられれば。だって彼は決まって現われるわけじゃないから。そのことはまだ言つてなかったかしら？ これまでに彼は二回姿を現さなかったことがあるの。このことを書くべきか迷うところね、もしかしたらそれが彼のリズムかもしれないし、もしかしたら二回なんて感覚、彼にはまったくなくて、いつだってきちんと来ていたのに、こんな苦情を言われるときよんとしてしまうかもしれないでしょ。まあ、そうでなくてもいつも彼はいろんなことにきよんとしているように見えるのだけだ。

きよんとしている、そう、その言葉が彼のことを一番よく言い表しているし、それが彼の特徴だと思ふな、私は。でもこれからは想像するだけに留めておくことを学ぶつもり、彼については。そしていずれは減らしていくつもり。でもそこに行きつくまでには、まだいろいろ気をもむこともありそう。例えば、彼がお腹をすかせているかもしれないな

いということはまだしも、彼の眠る場所を、安らげる場所を、彼が生まれる（かもしれない）場所を私が知らないということで。だって彼は安らぎを必要としているのだから。それどころか彼はいつも死を必要としているのかもしれない、私にはわからないけど。大変だと思うの、毎日、日が暮れるころ彼のようにあんな風に緑色で橋を渡るのは、彼のように見つめるのは、ちょうどいい時に姿を消すのは。

こういうロバには安らぎがいるのよ、たつぷりの安らぎが。だけど古い発電所なんかでいいのかな？ そんなので大丈夫なのかな？ ここを去った後すぐ、彼が夜を過ごす間、垂れ下がった電線は彼をやさしくたつぷりと撫でていてくれるのかな？ 彼の夜は私たちのより長いのだから。そして山なみの輪郭は、彼が昼を過ごす間、彼に友情を十分示してくれるのかな？ 彼の昼間は私たちのより短いのだから。何回も言うけど、私にはわからない。これから知ることもないと思う、だって私の目標は、彼についてわかっていることをだんだん減らすことだけだから。それだけたくさんのことを、彼が来るようになったこの半年間に私は学んでしまったの、彼のことを。そして彼がいつの日か来なくなった時、私は耐えるということも学ぶのかもしれない。だってそうなりかねないから。寒くなったら来ることでできなくなるかもしれないし。とすると、来られなくなることも来ることと同じように、もともと「来る」に含まれているのかもしれないね。そうなるまでに、彼が来なくても耐えられるくらい、目を橋に向けないでいられるくらい、私は彼についてわからなくなることを学びたい。

でもそうなるまでは、夢に見ることもあるでしょう、彼に緑色の父親と緑色の母親がいるところを、橋の向こうの庭の一つに彼のために干し草の束が置かれているところを、車両進入口の中へと消えていく若い人たちの笑い声を彼が聞くともなく聞いているところを。時には、彼が眠っているところを夢に見るかもしれない、死ぬところではなく。

## 訳者あとがき

ここに訳出した『私の緑色のロバ』が『現代ドイツ幻想小説』（種村季弘編、白水社）の中の一編として紹介されたのは、今から五十年ほど前の一九七〇年のことである。早くもこの時期にアイヒンガーの作品を日本に紹介したということだけでも編者の選択眼の確かさがうかがい知れるが、とりわけこの作品をドイツ幻想小説という系譜の中に位置づけたことに注目してみたい。この本の編者である種村季弘は解説の中で、「幻想的なものは、いうまでもなくたとえば狂人の妄想でもなければ、体験も記述も不可能な超越性でもない。すくなくとも幻想小説における幻想的なものは、理性的現実との密接な関係のなかにある」<sup>①</sup>と述べ、マルセル・シュネデルの次の言葉を引用している。

「われわれにとってこの言葉（幻想的）は、単に彼方の世界からやってくるもの、感覚と理性に反するもの、我々を恐怖させるものに対してもちいられるだけでなく、人が等しく現実世界とみとめているもののなかに、いま一つ別の秩序と次元とを、まるで押込み強盗のように侵入させてくるものである。」<sup>②</sup>

そして種村はこう述べている。「二つの異質の世界は相互に接触しないかぎりそれぞれ無事安泰であつて、驚異も恐怖も喚び起こすことはなく、したがって幻想的な事件を醸成（じようせい）することもないのである。幻想をたんなる妄想、夢、幻想のような隣接領域から区別するのもこの点である」。<sup>③</sup> この指摘は『私の緑色のロバ』を理解するうえで、五十年を経た今もお大変示唆に富んでいると言える。

この物語においてマルセル・シュネデールのいう「幻想的」なものとはまさに、この緑色のロバのことであろう。

つまり、「人が等しく現実世界と認めているもののなかに、いま一つ別の秩序と次元」が侵入してきたのである。そして種村のいう「幻想小説」とは、無論メルヒエンのことである。すでに拙論『イルゼ アイヒンガーとドイツメルヒエン』<sup>4</sup>の中で述べた通り、アイヒンガーの作品は、一人称小説であれ、三人称小説であれ、基本的にメルヘン的構造を——現実世界に暮らす主人公が異界に触れ、しばらくその場所に留まり、やがてまた現実世界に戻ってくる——有しているのである。

では、本文について詳しく見ていきたいと思う。この『私の緑色のロバ』という作品は、どうやら語り手である「私」が自分の半年間にわたる幻想的な体験を、親しい人物に、あるいは自分自身に向けて手紙にしたためたという形式で物語られているようである。

私は毎日、緑色のロバが跨線橋を渡るのを見る。ひずめの音が橋板に響き、頭は欄干の上に高く突き出ている。どこからやって来ているのか私にはわからない、まだ一度もずっと見ていたことがないから。

「私」は跨線橋を渡る緑色のロバを目撃して以来、そのロバのことが気にかかり、結局半年間にわたり、「私」は毎日緑色のロバを見るところという行為を続けてきた（正確に言うと、ロバが来なかった二日間を除いて）。そしてその話を手紙に書きつける中で、「ロバ」に対する思考を深めていく。

物語冒頭の第一段落では、ロバはひとりで跨線橋を渡ったり体が緑色だったりで、私たちが日常知っているロバと

比べると少し変わっているという印象を与えるものの、そこまで違和感を覚えることはない。

そして次の第二段落では、跨線橋を渡るロバが行き交う人たちのことを気にとめることもなく、橋の下を通過する列車の音や汽笛の音にすら関心を示さない様子が描かれている。その姿は私たちが日頃抱いているような、おとなしくて少し間の抜けたロバのイメージに近いかもしれない。ところがその後、ロバは「橋の中央を過ぎたところで、少しためらってから、引き返すこともなく消えてしまう」のである。そこまでくるともはや現実ではありえない光景である。しかし「私」は、ロバの行動が理解できるといふ。ただこの事をきっかけに、次の段落で「私」はロバについてのさまざまな問いを発しはじめる。緑色のロバはどんな風に、どこから来るのか、どこで生まれるのか、稲妻みたいに生まれるのか――。しかしそれに対する答えは得られない。そしてロバについて思考を巡らせているうちに「私」はこのロバのことを「私のロバ」と呼ぶようになり、やがてくつきりとした輪郭を備えた存在として「私」の目に映るようになる。そしてついには、「私」はロバのことを次のように語るのである。

彼がやって来るその瞬間のおかげで私は生きていられると言ってもいいんじゃないかな、彼の出現が私が呼吸するための空気を生み出してくれていると、まさしく彼が、彼の輪郭が、彼の緑色のニュアンスが、頭を垂れて線路を覗き込むその仕草が。

冒頭で描かれていたロバの愚鈍なイメージは、ここでは見る影もなくなっている。最初にも述べたように、この物語の語り手である「私」は、半年間にわたってほとんど毎日、跨線橋を渡る緑色のロバを、そしてそれが途中で消え

去るのを見つめてきた。その間、このロバについてさまざまな問いを投げかけ、考えを巡らせ、そしてロバはとうとう神々しい光を放つ希望の存在として「私」の目に映るようになる。

このような「私」の内なる変化を明らかにするためには、アイヒンガーがこの物語にロバを登場させた理由について考えてみる必要があるだろう。ロバには「のろま」とか「間抜け」といったネガティブなイメージがあり、現代ではこのイメージが主流であると思われるが、このイメージを世界に拡散させたのはキリスト教であるといわれる。他方ユダヤ教においては、ロバは神聖さの象徴といわれている。ユダヤ教ではロバは神の使いであり、この世とあの世を行き来することができる動物なのである。つまり、ロバはキリスト教社会とユダヤ教社会ではまったく相反するような象徴性を帯びた動物であるということになる。そしてここには、キリスト教的なロバの側面とユダヤ教的なロバの側面の両方が描かれているように思われる。ユダヤ人の母を持ち、キリスト教徒として育ったアイヒンガーが抱くロバのイメージと言っているのではないだろうか。ちなみに、ユダヤ教において緑色は「希望」のシンボルといわれている。そうすると、シャガールの『緑のロバ』という絵画をつい思い起こすが、シャガールは緑色のロバを優しさと無垢な生命の象徴として描いた。そしてシャガールもまたユダヤ人であり、敬虔なユダヤ教徒であった。

ところで、先程引用したハイライトシーンの後、突如「私」はこの半年で学んできたロバについて「わかっている」ことを、この先「わからなくなりたい」と語りはじめる。「わかっている (wissen)」から「わからなくなろうとする (nicht-wissen-wollen)」主人公の姿は、アイヒンガーの他の作品『より大いなる希望 (die größere Hoffnung)』や『鏡物語 (die Spiegelgeschichte)』<sup>(5)</sup>でも繰り返し描かれてきた。思考を逆回転させるようなこの一種独特な視点では、アイヒンガーがずっと問いつづけてきた問題であり、さらなる研究を要するテーマであろう。ただ、このテーマ



はアイヒンガー文学の根本に関わる問題でもあるので、今後じっくりと取り組み、アイヒンガー文学の理解を深めていきたいと思う。

なお、この作品を訳出するにあたって次のテキストを使用した。

Ilse Aichinger: Mein grüner Esel in : dies.: Eliza Eliza, Frankfurt/M. 1991, S. 79-82.

## 注

- (1) 種村季弘編『ドイツ幻想文学』（白水社、一九七〇年）二六七頁。
- (2) 同右。
- (3) 同右書、二六八頁。
- (4) 島浦一博：「イルゼ アイヒンガーとドイツメルヒェン」『『教養研究』第二三卷第三号、二〇一七年、一頁～一七頁』参照。
- (5) 島浦一博：「『鏡物語』とは何なのか？——イルゼ アイヒンガーの『鏡物語』について——」『『教養研究』第二三卷第二号、二〇一六年、一頁～二二頁』参照。

